

2. 文学研究科

I	文学研究科の教育目的と特徴	2 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	2 - 4
	分析項目 I 教育の実施体制	2 - 4
	分析項目 II 教育内容	2 - 7
	分析項目 III 教育方法	2 - 11
	分析項目 IV 学業の成果	2 - 13
	分析項目 V 進路・就職の状況	2 - 14
III	質の向上度の判断	2 - 16

名古屋大学文学研究科

I 文学研究科の教育目的と特徴

1. (目的と基本方針) 文学研究科の目的は、「人文学における学術的知識及び理論並びにその応用を教授研究し、それらの深奥を究め、文化の進展に寄与するとともに、人文学における高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を持った研究者並びに高度専門職業人を養成する」ことにある。この目的を追求するため、文学研究科では、「来るべき時代と歴史に対する深い洞察力を持ち、言葉による論理的表現と研究推進を行う創造的能力によって、人文学の伝統を継承し発展させる意欲的な人材」を養成することを教育の基本方針にしており、これは、名古屋大学学術憲章の教育に関する基本的目標「自発性を重視する教育実践によって、論理的思考と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる」を人文学の分野で実現しようとするものである。

2. (目標と方針) 文学研究科では、教育目標として「人文学の知の伝統に対する探究心」「新時代への深い洞察力」「言語による表現力」を掲げ、次の方針の下に、その目標の達成を図っている。

(1) 多様な資料の厳密な分析を通して、古今東西にわたる人間の精神的所産の解明に取り組みできた人文学的な知のあり方を身につける。(中期目標M3-中期計画K10と対応)

中期目標M3

魅力ある独自の教育プログラムを提供し、優れた人材の育成を図る。

中期計画K10

魅力ある教育プログラムを提供し、それに沿った実効ある教育を実施する。

(2) フィールドワークも積極的に取り入れ、ものごとを実証的に解明する姿勢を身につける。(中期目標M1-中期計画K3と対応)

中期目標M1

質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す。

中期計画K3

領域型分野及び文理融合型分野の専門教育の充実を図る。

(3) 地域および国内外の学術交流を通して、自ら課題を発見し、これを解明する能力を身につける。(中期目標M3-中期計画K13と対応)

中期目標M3

魅力ある独自の教育プログラムを提供し、優れた人材の育成を図る。

中期計画K13

全国レベルで活躍できる人材を育成するため、課外活動プログラムに特別の支援を行う。

(4) 自らの考えを口頭あるいは文章で論理的に主張する訓練を通して、高い言語運用能力を身につける。(中期目標M1-中期計画K5と対応)

中期目標M1

質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す。

中期計画K5

高度専門職業人養成を始めとする生涯教育体制の充実を図る。

3. (組織の特徴・特色) 平成12年の大学院重点化に伴い、従来の11専攻を人文学専攻1専攻に改組した。学部兼担の9講座と大学院専担講座である比較人文学、日本文化学の2講座からなる。この改組の目的は、従来の専門分野にとらわれることなく、広い視野に立った大学院教育を可能にすることにあつた。教育活動の基盤は11の講座とそれに

属する専門(研究室)にあり、少人数教育によるきめ細かな指導に特色がある。また、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、グローバル COE プログラム採択により、人材育成のためのプログラムが充実した。

4. (入学者の状況等) 前期課程は9月と2月、後期課程は2月に入試を行っている。前期課程、後期課程とも社会人特別選抜を実施している。入学定員に対する入学者は、前期課程で10%以上下回ることがあり、広報活動を通して受験者の確保に努めている。一方、収容定員に対する在学者数は、後期課程で定員の2倍に上り、研究指導の強化によって、標準修業年限内に課程博士論文が提出できるような体制の整備を進めている。

【想定する関係者とその期待】

文学研究科の教育活動に対する第一義的な関係者としては、在学生・受験生及びその家族、修了生、修了生の雇用者を想定しており、人文学的な知を踏まえて、現代社会における諸問題に柔軟に対処できる、深い教養と高い知的能力を持った人材の育成に、その期待はあると考えている。さらに、第二義的な関係者としては、地域社会の関係者があり、知的能力の高い人材が地域の文化活動の中心的な役割を担うことによって、その地域の文化的な活力が高まることに期待があると考えている。

名古屋大学文学研究科 分析項目 I

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 1-1 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

本研究科は人文学専攻 1 専攻からなり、博士前期・後期課程における教育目標を達成するため、4つのコースが置かれ、19の専門(研究室)単位で教育活動が行われている。こうした構成により、学生は、広い視野に立って人文学の多様な分野を学べ、また、関心を持った分野については専門的に深く学ぶことが可能になっている。【資料 I-1-1、別添資料 I-A 参照】

資料 I-1-1 文学研究科のコースと専門

コース	専門
総合人文学	文化人類学・宗教学・日本思想史
基層人間学	哲学、西洋古典学、言語学、中国哲学、中国文学、インド文化学
歴史文化学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学
文芸言語学	日本文学、日本語学、英米文学、フランス文学、ドイツ文学、英語学

【出典：2008年度名古屋大学文学研究科学生便覧 p.99】

教員定員は設置基準等の関連法令に基づいており、大学設置基準の改正に対応し、教授・准教授・講師・助教・助手を置く。現在の教員数は 61 名で欠員はない。教員の採用に際しては、「教授・助教授選考申し合わせ」に基づき、教育内容に見合った研究業績を持つ優秀な人材の確保に努めている。また、公募制をとり、年齢構成にも配慮した人事を行っている。こうした取組の結果、どの研究室にも、教授 1、准教授(又は専任講師) 1 が最低限配置され、学生の指導に支障のない体制を確保している。教育課程の展開に必要な教育支援者、TA 等の教育補助者の活用も図っている。【資料 I-1-2、I-1-3、別添資料 I-A 参照】

資料 I-1-2 文学研究科の人事における公募の割合

	採用件数	公募件数	公募割合
平成16年度	2	0	0
平成17年度	0	0	0
平成18年度	4	1	25%
平成19年度	3	3	100%

【出典：文系総務課記録】

資料 I-1-3 文学研究科教員の年齢別、男女別構成 (平成 19 年度)

	男性	女性	計
20歳代	0	0	0
30～34歳代	1	0	1
35～39歳代	7	1	8
40～44歳代	9	4	13
45～49歳代	12	2	14
50～54歳代	10	1	11
55～59歳代	10	0	10
60～63歳代	4	0	4
計	53	8	61

【出典：文系総務課記録】

学生定員は、前期課程 60 名、後期課程 30 名で、教員一人当たりの学生数は、一学年につき前期課程が約 1 名、後期課程が 0.5 名と、十分な指導が行える人数になっている。また、各研究室に見直し定員を設け、特定の研究室に学生が集中しないようにしている。収容定員に対する在籍者数は、前期課程で 1 割ほどの超過、後期課程ではほぼ 2 倍に達している。【資料 I-1-4、I-1-5 参照】

資料 I-1-4 文学研究科の学生定員と現員(入学者数推移) 各年5月1日現在数

	前期課程 1年		前期課程 2年		計		後期課程 1年		後期課程 2年		後期課程 3年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
平成15年度	60	56	52	80	112	136	30	39	26	33	26	98	82	170
平成16年度	60	54	60	78	120	132	30	47	30	37	26	98	86	182
平成17年度	60	53	60	77	120	130	30	42	30	46	30	100	90	188
平成18年度	60	37	60	71	120	108	30	33	30	41	30	119	90	193
平成19年度	60	69	60	64	120	133	30	27	30	31	30	127	90	185

【出典：文系教務課記録】

資料 I-1-5 文学研究科の研究室別学生数 (平成19年度)

専 門	前期課程			後期課程				合計
	1年	2年	計	1年	2年	3年	計	
文化人類学・宗教学・日本思想史	6	7	13	6	10	29	45	58
日本文学	11	4	15	1	8	17	26	41
哲学	1	3	4	1	2	6	9	13
西洋古典学	2	2	4	0	0	4	4	8
言語学	6	4	10	2	1	8	11	21
中国哲学	1	4	5	1	0	2	3	8
中国文学	2	3	5	1	0	3	4	9
インド文化学	2	1	3	0	0	2	2	5
日本史学	5	7	12	3	1	8	12	24
東洋史学	2	0	2	1	0	4	5	7
西洋史学	4	7	11	2	0	5	7	18
美学美術史学	8	7	15	2	1	6	9	24
考古学	1	1	2	2	0	1	3	5
日本文学	4	2	6	2	3	16	21	27
日本語学	4	3	7	2	3	8	13	20
英米文学	1	2	3	0	0	0	0	3
フランス文学	4	2	6	1	0	1	2	8
ドイツ文学	2	3	5	0	2	3	5	10
英語学	3	2	5	0	0	4	4	9
合計	69	64	133	27	31	127	185	318

【出典：文系教務課記録】

別添資料 I-A 名古屋大学文学研究科組織図および教員配置一覧

観点1-2 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

各コースから1名ずつ選出された委員と副研究科長で構成する学務委員会が随時開催され、教育活動の実施に関わる諸事項の検討、決定を行い、また、学務委員会の提案に基づいて、教授会で必要な議決を行う体制が整えられている。平成17年度は15回、平成18年度は25回、平成19年度は10回開催された。また、教員の教育活動の評価、検証を行うため、副研究科長および数名の室員からなる教育研究推進室を設置し、教育研究プロジェクトの企画、授業評価アンケートの分析、教育環境の整備など、教育研究体制を総合的に評価し、改善するための活動を行っている。【別添資料 I-B、I-C参照】ファカルティ・ディベロップメントは、教育研究推進室と学務委員会が企画立案し、毎年2回、教員を対象にした研修を行っている。これまでに、カリキュラムのあり方、授業評価のあり方、成績評価のあり方、TAの活用法などについて研修を行い、これらの問題に関する教員の理解を深め、教育の現状について認識を共有することができた。また、教育研究推進室では、大学院教育を改善するためのワークショップを毎月開催して、教員同士あるいは大学院生も交えた意見交換を行っている。教育研究推進室による自己評価に加え、順次研究室ごとのピア・レビューを実施してきたほか、国内外の優れた研究者5名からなるアカデミック・アドヴァイジング・コミッティを設置し、随時、外部からの意見も聴取している。【資料 I-2-1、I-2-2、I-2-3参照】

名古屋大学文学研究科 分析項目 I

これらの取り組みの結果、教育活動上の懸案について、教員同士が随時意見を交換できる雰囲気が醸成されつつある。授業内容の改善やカリキュラムの改革などは、可能なものから随時実施されており、それぞれ一定の効果をあげている。

資料 I-2-1 ファカルティ・ディベロップメント、ワークショップ開催実績一覧

年度	開催日	講演者	題目	報告書
18	6月14日	鳥居朋子 (高等教育研究センター)	厳格な成績評価に向けて 明確な成績評価基準とは何か	
18	7月28日	J.G. マニング (スタンフォード大学)	スタンフォード大学古典学科における大学院教育	メタブティヒア カ創刊号所収
18	11月22日	スラボン・ダムリクン (チェンマイ大学)	タイの大学院におけるフィールドワーク教育	メタブティヒア カ創刊号所収
18	12月27日	北川千織 (日本学術振興会特別研究員)	動物考古学研究とエジプトにおけるフィールドワーク	メタブティヒア カ創刊号所収
18	1月24日	佐久間淳一	大学院の共通科目について	メタブティヒア カ創刊号所収
18	3月14日	G.W. フライ (ミネソタ大学)	ティーチングアシスタントの効果的な活用法	メタブティヒア カ創刊号所収
19	4月25日	杉藤重信 (椙山女学園大学)	先住民運動と調査倫理：オーストラリアにおけるフィールドワークと大学院教育	メタブティヒア カ第2号所収
19	5月23日	W.J. ハロフスキー (名古屋学院大学)	学術目的のための実用英語 — アブストラクトの書き方	メタブティヒア カ第2号所収
19	6月13日	栗本英和 (総合企画室)	教育の評価について考える	メタブティヒア カ第2号所収
19	7月2日	高橋亮介 (日本学術振興会特別研究員)	ロンドン大学キングズ・カレッジ 古典学科での学位論文指導	メタブティヒア カ第2号所収
19	7月27日	河宇鳳 (韓国国立全北大学校人文大学学長)	韓国の人文系大学院における研究・教育の現状について	メタブティヒア カ第2号所収
19	10月31日	和崎春日、羽賀祥二、高橋亨	課程博士論文指導の実践研究	メタブティヒア カ第2号所収
19	11月21日	G.R.F. フェラーリ (カリフォルニア大学バークリー校)、J.G. マニング (スタンフォード大学)	UC バークリー校の大学院教育	メタブティヒア カ第2号所収
19	12月5日	大塚雄作 (京都大学)	教員の教育活動の評価について	メタブティヒア カ第2号所収
19	12月27日	周藤芳幸	大学院教育改革の最前線 — 近年の施策と他大学の取組	メタブティヒア カ第2号所収

【出典：文学研究科教育研究推進室資料】

資料 I-2-2 ピア・レビュー開催実績一覧

年度	開催日	対象研究室	報告書
13	9月28日	言語学、インド文化学、西洋史学、美学 美術史学、日本文学、英米文学	外部評価ピア・レビュー報告書 (2002年3月)
16	7月20日	比較人文学、中国哲学、中国文学、日本 史学、日本語学、フランス文学、英語学	外部評価ピア・レビュー報告書 (2005年3月)
18	7月28日	日本文化学、哲学、西洋古典学、東洋史 学、考古学、ドイツ文学	外部評価ピア・レビュー報告書 (2007年3月)

【出典：文系総務課記録】

資料 I-2-3 アカデミック・アドヴァイジング・コミッティ委員名簿

1. V. N. Jha / University of Pune (インド哲学)
2. Gisèle Seginger / Université Paris-Est (フランス文学)
3. Joseph G. Manning / Stanford University (西洋史)
4. 宮川 繁 / Massachusetts Institute of Technology (言語学, 比較文化論)
5. Patrick Geary / University of California at Los Angeles (ヨーロッパ中世史)

【出典：文系総務課記録】

別添資料 I-B 名古屋大学文学研究科各種委員会委員一覧

別添資料 I-C 名古屋大学文学部・文学研究科教育研究推進室内規

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 教育課程を遂行するために必要な教員が定員どおり確保され、かつ教員の配置も教育内容に合致していて、社会に向けて公表された教育目標の達成が可能な体制が整っ

ている。また、学生数は教員数に見合っている。したがって、観点1-1に関しては期待される水準にある。一方、教育方法・教育内容を点検し、改善するための体制の整備状況も、ワークショップやFD研修、教員同士の日常的な意見交換によって問題の共有が図られており、授業改善につながる提案も随時実行に移されているので、観点1-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点2-1 教育課程の編成

(観点に係る状況)

文学研究科の教育課程は、それ自体として十分な体系性を持つと同時に、文学部の教育課程との連続性も考慮に入れて編成されている。教育課程を明示するため、コースツリーが策定されており、コースツリー上の個々の授業科目は、研究科および各コースの教育目標に対応して設定されている。また、教育目標が達成できるよう、各コースの履修モデルを提示している。個々の授業は、教育内容にふさわしい研究実績を持つ教員が担当しており、最新の研究成果を踏まえた教育が行われている。平成19年度にグローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」が採択されたことに伴い、最先端の研究を教育内容に反映させるべく、平成20年度から、テキスト布置解釈学関係科目4単位を後期課程の必修単位とすることを決定した。【資料Ⅱ-1-1、Ⅱ-1-2、Ⅱ-1-3、別添資料Ⅱ-A参照】

資料Ⅱ-1-1 文学研究科コースツリー



【出典：名古屋大学大学院文学研究科案内2008，p.3】

資料Ⅱ-1-2 各コースの教育目標

【総合人文学コース】従来の学問の枠組みを乗り越え、広く学際的な見地から日本文化を総合的に展望し、かつ比較の視点から諸民族の固有文化の特質を理解できる、知的的好奇心と国際性に富んだ人材の育成をめざす。

【基層人間学コース】東西の文明と文化の基層をなす思想、倫理、文学、言語などの問題を解明する能力を養い、人間に関する普遍的理解に立って現代社会の諸課題の解決に貢献できる人材の育成をめざす。

【歴史文化学コース】過去の人間の歴史的営為について、文献史料・美術作品・物質資料の厳密な分析やフィールドワークに基づいて、自ら課題を発見し、これを解明する能力を、地域および国内外の学術交流の中で涵養するとともに、大学教員・研究職・学芸員など高度専門職を担う人材を養成することを目標とする。

名古屋大学文学研究科 分析項目Ⅱ

【文芸言語学コース】文献及びその他の資料の緻密な読みに基づき、歴史的に蓄積された文化的営為としての文学及び言語現象を、実証的・理論的に分析することによって、人間の精神活動の内奥に迫る。

【出典：2008年度名古屋大学文学研究科学生便覧 pp.15-16】

資料Ⅱ-1-3 文学研究科の修了要件(単位数一覧)

前期課程(一般)

科目区分	単位	備考
講義	8	各専門の授業科目(共通科目の講義または演習を4単位まで含めることができる)
演習	12	
その他	10	
総計	30	

前期課程(社会人特別選抜)

科目区分	単位	備考
講義	12	各専門の授業科目
演習		
その他	18	
総計	30	

後期課程(一般、社会人特別選抜)

科目区分	単位	備考
講義又は演習	4	各専門の授業科目
テキスト布置解釈学	原論	2
	各論	2
総計	8	

【出典：2008年度名古屋大学文学研究科学生便覧 p.99】

人材育成の観点からは、教職資格取得のための科目を開講し、高度専門職への就職や教員のリカレント教育にも対応できる体制を取っている。また、平成18年度に採択された「魅力ある大学院教育」イニシアティブの「人文学フィールドワーカー養成プログラム」を活用し、フィールドワークの手法に精通した行動的な研究者の育成を目指している。【資料Ⅱ-1-4、別添資料Ⅱ-B参照】

資料Ⅱ-1-4 人文学フィールドワーカー養成プログラム開講科目一覧

フィールド人文学基礎論	講義又は演習	2単位
フィールド人文学応用論	講義又は演習	2単位
フィールド調査実習A	演習	2単位
フィールド調査実習B	演習	2単位
外国語発表法	演習	2単位
外国語論文作成法	演習	2単位

【出典：2008年度名古屋大学文学研究科学生便覧 p.104】

文学研究科では、教育目標を達成する上で、学位論文の作成を特に重視している。そのため、学生に対する個別の研究指導にも力を入れており、全教員がオフィスアワーを設けているほか、オフィスアワー以外の時間帯にも、学生からの質問や履修計画等に関わる相談に随時応じている。各研究室には最低2名の教員が配置されており、多くの研究室で複数の教員による演習・発表形式の合同授業が行われているため、研究テーマが一人の教員の指導によって左右されることはない。また、ほとんどの研究室で、授業時間外に学外者も含む定例の研究会が開催されている。博士後期課程では、年度ごとに認定論文を提出させ、段階的にレベルアップすることで、課程博士論文の作成が容易になるよう配慮している。また、研究指導を強化するため、「特別研究」4単位を博士後期課程の必修科目に指定している。【資料Ⅱ-1-3、Ⅱ-1-5参照】

資料Ⅱ-1-5 研究指導に関する内規

- 第1条 前期課程の研究指導は、修士論文で認定する。その提出期日は、研究科教授会が定める。
- 第2条 後期課程在学者は、研究指導の認定を受けるため、「研究指導認定論文」を提出する。研究指導認定論文は、在学期間1年ごとに提出するものとし、提出時期は、当該期間後半の2月中頃又は8月末とする(期日は年度ごとに定める)。ただし、該当する時期に提出できなかった者は、次回以降の提出時期に提出できることとする。認定論文には提出年度及び、それが第何回目の論文にあたるかを明記する。
研究指導認定論文は、指導教員がこれを審査し、成績(A、B、C、Dとし、Dは不

可)をつけ、研究科教授会に報告し、承認を得るものとする。
 在学期間2年分以上の研究成果に相当するとされる研究指導認定論文については、それを研究科教授会に回覧し指導教員の説明にもとづいて認定する。
 研究指導認定論文を3回又はそれ以上提出し認定を受け、所定の単位を修得した者は、満期退学届を提出することができる。

【出典：2008年度名古屋大学文学研究科学生便覧 p.129】

別添資料Ⅱ-A グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

別添資料Ⅱ-B 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「人文学フィールドワーカー養成プログラム」

観点2-2 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

学生や社会に対し、文学研究科における人材育成の目的を明確にするため、アドミッションポリシーおよび教育目標を、Webサイトや案内冊子、募集要項に明記している。また、大学院を目指す学部生に対しては、大学院説明会を通じて周知を図っている。多様な学生を受け入れることによって教育効果を高めるために、前期課程では年に二度入試を行っているほか、前期課程、後期課程とも社会人特別選抜を実施している。また、研究生や留学生も積極的に受け入れている。【資料Ⅱ-2-1、Ⅱ-2-2、Ⅱ-2-3、Ⅱ-2-4、Ⅱ-2-5参照】

資料Ⅱ-2-1 文学研究科アドミッションポリシー

来るべき時代と歴史に対する深い洞察力を持ち、言語による論理的表現と研究推進を行う創造的能力によって、人文学の伝統を継承し、発展させる意欲の人材を求めます。

【出典：名古屋大学大学院文学研究科案内2008, p.53】

資料Ⅱ-2-2 大学院説明会開催実績一覧（平成19年度）

文学研究科ナビゲーション（学部3年生向け）

日時：12月5日（水）午後3時～
 場所：文系総合館308、309号室、1AB講義室

第1部 午後3時～ 文系総合館308、309号室

1. 研究科長挨拶
2. グローバルCOEプログラム紹介
3. 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ紹介
4. 前期課程2年次から来春就職予定の院生の体験談

第2部 午後3時45分～ 文系共同館1AB講義室

1. 現役大学院生による研究内容・研究室の紹介
2. 各研究室の院生による個別相談

社会人向け大学院入試説明会

日時：12月5日（水）午後6時～
 場所：文系総合館308、309号室

1. 研究科長挨拶
2. 組織・コース（専門）紹介
3. 出願等事務手続きの説明
4. グローバルCOEプログラム紹介
5. 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ紹介
6. 現役社会人学生による講演

【出典：文学研究科広報体制委員会資料】

資料Ⅱ-2-3 社会人学生受入状況

	博士課程（前期課程）			博士課程（後期課程）		
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
平成17年度	8	4	4	10	5	5
平成18年度	2	2	2	11	8	8
平成19年度	12	5	5	12	9	9

【出典：文系教務課記録】

名古屋大学文学研究科 分析項目Ⅱ

資料Ⅱ-2-4 研究生受入状況

	大学院研究生在籍者数	
	5月1日付	11月1日付
平成17年度	13	15
平成18年度	10	11
平成19年度	15	17

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-5 留学生受入状況

5月1日現員	前期課程1年			前期課程2年			合計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
平成17年度	7	0	7	4	0	4	11	0	11
平成18年度	2	2	4	9	0	9	11	2	13
平成19年度	13	1	14	3	2	5	16	3	19

5月1日現員	後期課程1年			後期課程2年			後期課程3年			合計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
平成17年度	3	3	6	3	1	4	16	3	19	22	7	29
平成18年度	2	1	3	3	3	6	12	2	14	17	6	23
平成19年度	2	0	2	2	1	3	10	4	14	14	5	19

5月1日現員	大学院研究生			大学院特別研究学生		
	私費	国費	計	私費	国費	計
平成17年度	2	1	3	1	0	1
平成18年度	1	0	0	0	0	0
平成19年度	4	2	6	1	0	1

【出典：文系教務課記録】

社会人学生に対しては、5限から7限を中心に授業を開講している。また、通常の間帯に研究指導ができない場合には、土日に面談の機会を設けたり、電子メールを活用したりして、研究指導に支障が生じないようにしている。留学生に対しては、留学生専門教育教員を配置し、非常勤のカウンセラーを雇用して、学習上、生活上の不安や不満の解消に努めている。さらに、日本語能力の向上や学習支援のため、チューター制度を積極的に活用している。【資料Ⅱ-2-6、Ⅱ-2-7参照】

資料Ⅱ-2-6 夜間開講(5限～7限)状況

	平成17年度			平成18年度			平成19年度		
	前期	後期	通年	前期	後期	通年	前期	後期	通年
月・5	6	3	2	5	5	4	10	10	0
月・6	0	0	1	1	0	0	3	4	0
月・7	0	0	0	0	0	0	1	1	0
火・5	3	2	6	5	5	6	8	11	3
火・6	1	1	5	1	1	4	9	9	3
火・7	0	0	4	0	0	2	6	6	0
水・5	0	1	1	0	2	1	2	2	0
木・5	2	1	6	2	2	5	11	11	3
木・6	0	0	3	0	0	2	1	1	0
木・7	0	0	1	0	0	0	0	0	0
金・5	3	3	4	1	1	4	7	8	0
金・6	0	0	1	0	0	2	1	1	2
金・7	0	0	1	0	0	1	1	1	0
小計	15	11	35	15	16	31	60	65	11
総計	96			93			147		

(通年授業は2コマに換算)

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-7 チューター採用実績

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
採用数	19	16	18

【出典：文系教務課記録】

学生のキャリア形成のニーズに対しては、必要に応じて他研究科の授業の聴講も認めているほか、海外の大学への留学を推進する体制をとっており、NUPACE協定校をはじめ、外国の大学で取得した単位の互換が行われている。また、教育面での能力の育成のため、多くの院生をTAに採用し、授業の準備や補助、学部学生の指導などを経験させている。また、一部の院生はRAに採用し、教員の研究プロジェクトの補助的な仕事を経験させている。さらに、優れた院生は、21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」およびグローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」の研究員に採用し、自立した研究者として処遇している。【資料Ⅱ-2-8、Ⅱ-2-9参照】

資料Ⅱ-2-8 短期交換留学制度による学生の派遣実績一覧

平成17年度	インドネシア	スラバヤ国立大学大学院
	中国	南京大学
平成18年度	イギリス	ウォリック大学
平成19年度	ドイツ	ミュンヘン工科大学
	アメリカ	ニューヨーク大学
	アメリカ	シンシナティ大学
	ドイツ	フライブルク大学

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-9 TA、RA、COE 研究員採用実績一覧

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
TA	131	135	129	135
全学TA	6	7	11	10
RA		7	7	8
COE研究員	12	10	8	10

【出典：文系総務課記録】

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由)教育目標を達成するのに必要な教育課程が、コースツリーに則って編成されており、観点2-1に関しては期待される水準にある。一方、文学研究科における人材育成の目的は、社会に広く公開されており、その目的に適合する多様な人材を受け入れ、キャリア形成のためのさまざまな機会を提供しているため、観点2-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点3-1 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点到係る状況)

授業形態には講義と演習があり、教育目標を達成するのに最も効果的な授業形態が選択されている。「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択を機に、フィールドワークの手法の習得にも力を入れており、学生から現地調査の計画を募集し、国内外の調査地へ派遣している。また、より広い視野から人文学の課題に取り組むことができるように共通科目を拡充した。研究指導を強化するための工夫として、後期課程では「特別研究」を必修科目として開講している。多くの授業で少人数教育が行われており、学生のニーズと学力に合わせたきめ細かな指導が行われている。年度の初めには、部局および研究室ごとのガイダンスを行い、コースツリーや履修モデルと個々の授業の対応関係や、個々の授業の履修によって達成されるべき教育目標について説明を行っている。また、授業の目的や内容、方法等については、シラバスに明記すると共に、初回の授業でも説明し、受講生に周知している。前期課程の授業には、必要に応じて後期課程の大学院生がTAとしてつき、学生がより高度な理解に到達できるよう配慮している。【資料Ⅲ-1-1、Ⅲ-1-2、Ⅲ-1-3参照、別添資料Ⅲ-A参照】

資料Ⅲ-1-1 大学院開講形態別開講授業数 (平成19年度)

	前期	後期	通年	計
講義	74	77	0	151
演習	136	135	21	292
	計			443

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅲ-1-2 大学院授業科目履修登録者数一覧 (平成19年度)

前 期 課	履修登録者数		科目数
	0名	1名	
	0名	49	
	1~5名	268	
	6~10名	65	
	11名~20名	12	
	21名~30名	0	

名古屋大学文学研究科 分析項目Ⅲ

程	31名以上	0
	合計	394
後 期 課 程	履修登録者数	科目数
	0名	49
	1～5名	268
	6～10名	65
	11名～20名	12
	21名～30名	0
	31名以上	0
合計	394	

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅲ-1-3 文学研究科共通科目

研究科共通	総合人文学コース	基層人間学コース	歴史文化学コース	文芸言語学コース
総合人文学	多元文化論	文明基礎論	史学方法論	西洋文化論
人文学先端研究		人間基礎論	歴史資料学	文芸批評論
人文学実践研究		言語研究法	文化財学	比較文化論

【出典：2008年度文学研究科学生便覧 p. 94】

別添資料Ⅲ-A 平成19年度文学研究科シラバス

観点3-2 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

学生は履修モデルに従って授業を履修するが、各自の関心に合わせ、一定の範囲で授業を選択することができる。その際、学生が主体的に授業を選択できるよう、各授業の目的とコースツリー上の位置づけをシラバスに明記すると共に、授業の内容についてもできるだけ具体的に記述している。シラバスには、教科書・参考書や予習・復習、宿題・課題等に関する指示も記載しており、学生が自宅でも学習できるよう配慮している。また、学習を進めるにあたって目標を定めやすいよう、成績評価の方法と基準も明記している。シラバスはWeb上で公開されており、いつでも参照できるようになっている。学生には、主指導教員を含め、指導教員が複数決まっているが、主体的な学習を支えるため、全教員がオフィスアワーを設け、電子メールアドレスを学生便覧に記載し、学習や研究に関する相談がいつでも可能な態勢をとっている。また、各研究室に1部屋ずつ、大学院生室が配置されており、授業時間外でも自習が可能な環境を確保している。文学研究科の研究棟は全室午後十時半までに退室することになっているが、必要がある場合は、指導教員の承認を得て、それ以降も使用できるよう配慮している。【資料Ⅲ-2-1、別添資料Ⅲ-A参照】

資料Ⅲ-2-1 文学研究科棟用途別部屋数

	リテラチャー・ラボ	大学院生室	資料室、実験室等	教員研究室
文学部棟1階	2	1	1	5
文学部棟2階	5	5	5	16
文学部棟3階	6	7	3	21
文学部棟4階	8	7	0	21

【出典：2008年度文学研究科学生便覧 pp. 4-7】

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 教育目標を達成するために最も効果的な授業形態が選択され、少人数教育やTAの活用など、学生の立場に立った学習指導法が工夫されているので、観点3-1に関しては期待される水準にある。一方、主体的な学習を行う際の指針となるシラバスが整備され、主体的な学習を行う環境も、大学院生室の設置やメールアドレスの公開によって確保されているので、観点3-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点4-1 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

文学研究科の教育課程で身につけるべき学力や資質・能力は、「人文学の知の伝統に対する探究心」、「新時代への深い洞察力」、「言語による表現力」であり、アドミッションポリシーや教育目標として募集要項、Web サイト、案内冊子等に明記している。また、文学研究科の教育目標と各授業の対応は、シラバスに明記されている。

授業は必要な開講回数を確保するとともに、単位の実質化のため、参考図書・準備学習に関する指示をシラバスで周知するなどの取組を実施している。成績評価は、シラバスに明記された規準・方法に基づいて厳正に行われているが、著しい偏りがないことを確認するため、教育研究推進室で成績評価の分布状況を点検している。授業の成果や効果については、授業ごとに実施される授業評価アンケートで確認している。授業評価アンケートの結果は、教育研究推進室で分析し、教員にフィードバックして、授業改善に役立てている。前期課程では、複数指導教員体制により修士論文作成に向けた研究指導を行い、標準修業年限内での学位授与率を高水準に保っている。修士論文に対しては、他専門の教員を含む複数教員による口答試問を行い、教授会で合否判定を実施している。また、取得単位に基づき教授会で厳正な修了判定を行っている。後期課程では、複数指導教員体制により課程博士論文作成に向けた研究指導を行っており、標準修業年限内での学位授与率向上に向け、研究指導の強化を図っている。課程博士論文に対しては、他専門の教員を含む複数教員による口答試問を行い、教授会で合否判定を実施している。こうした研究指導の結果、大学院生による学会発表数、論文発表数は高い水準を維持している。【資料Ⅱ-1-5、Ⅳ-1-1、Ⅳ-1-2、Ⅳ-1-3、Ⅳ-1-4、別添資料Ⅲ-A参照】

資料Ⅳ-1-1 標準修業年限内での修士学位授与率

	修了者数 (a)	入学年度別修了者数								(b)/(a) %
		10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度 (b)	16年度 (b)	17年度 (b)	
16年度	52		1		4	11	36			69
17年度	50					2	11	37		74
18年度	42						2	9	31	74

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅳ-1-2 課程博士学位授与数

	授与数
平成16年度	13
平成17年度	16
平成18年度	32

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅳ-1-3 標準修業年限内での課程博士学位授与率

	授与数 (a)	満期 退学者	授与者内訳 入学年度別修了者数								(b)/(a) %
			8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度 (b)	15年度 (b)	
16年度	13	8	1	1		1	1		1		8
17年度	16	8				1	1	1	2	3	19
18年度	32	15					1	7	5	4	0

備考：平成16年度の標準修業年限修了者とは、平成14年度入学者で修了した者とする。

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅳ-1-4 大学院生の研究業績数

年度	論文発表数	学会発表数	受賞数
16	83件	97件	1件
17	111件	114件	1件
18	106件	94件	1件
19	111件	106件	0件
計	411件	411件	3件

観点 4-2 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

各授業の成果や効果については、記述式アンケートまたは教員と学生との意見交換による授業評価を通じて個々の教員が確認している。【資料Ⅳ-2-1 参照】

平成 18 年度末に当該年度の修了生 42 名を対象とした調査では、同数の修了生から回答があり、「人文学の知の伝統に対する探究心」、「新時代への深い洞察力」、「言語による表現力」という教育目標について、79.5%、84%、79.5%の修了生が、これらの学力や能力・資質を身につけたと答えている。また各目標について、56.8%、47.7%、45.4%の修了生が研究活動によって、さらに 29.5%、31.8%、36.3%の修了生が専攻独自の専門科目によって養われたと考えている。このことから、教育目標に掲げた資質・能力を育成する場として、学位論文作成を中心とする研究活動が果たす役割は非常に大きいと考えられる。【別添資料Ⅳ-A 参照】

資料Ⅳ-2-1 文学研究科授業評価アンケート (平成 19 年度)

1. あなたが自分の研究を深めていく上で、この授業はどのように役立ちましたか(あるいは役立つと思われますか)。
 2. 授業一回当たり、どのくらいの時間を使って、予習や復習、課題などに取り組みましたか。
 3. 学習環境について、何か要望があれば書いてください。
- この授業について、何か感想があれば自由に書いてください。

別添資料Ⅳ-A 平成 18 年度修了時成果調査

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由)標準修業年限内の前期課程修了率、大学院生の学会発表や論文発表などの指標が高い水準にあり、授業や学位論文など、教育の成果や質を管理する体制も整備されており、標準修業年限内での課程博士学位授与率はやや低い水準にあるが、観点 4-1 は期待される水準にある。また、学生による授業評価や修了時の学生を対象とした成果調査では、教育課程の成果に対して高い満足度を示す結果が得られており、観点 4-2 は期待される水準にある。

分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 5-1 修了後の進路の状況

(観点に係る状況)

平成 18 年度末に実施した進路状況調査によれば、前期課程修了生 41 名のうち、17%が民間企業の多様な職種、7%が官公庁、7%が教職に就いている。また 37%は後期課程に進学しており、高度な専門性を備えた学術的知識や能力への発展の基礎となる学力や素養を、前期課程の教育を通じて身につけることができたことを示している。また、後期課程修了者および満期退学者 29 名のうち、13 名が大学教員(うち非常勤が 9 名)、2 名が高校教員になり、1 名が日本学術振興会特別研究員となっており、高度な専門性を備えた学術的知識を、後期課程の教育を通じて身につけることができたことを示している。【資料Ⅴ-1-1 参照】

資料Ⅴ-1-1 進路状況 (平成 18 年度)

前期課程		一般学生	社会人 特別選抜	留学生	合計
就職	一般企業	6	0	1	7
	公務員	3	0	0	3

	教員	3	0	0	3
進学	後期課程に進学	8	3	2	13
	その他	1	0	1	2
その他		8	3	2	13
合計		29	6	6	41

後期課程		修了者	満期退学者	合計
就職	大学教員(常勤)	3	1	4
	大学教員(非常勤)	8	1	9
	高校教員(常勤)	1	0	1
	高校教員(非常勤)	0	1	1
	学振特別研究員	1	0	1
	その他	2	3	5
その他		3	6	9
合計		17	12	29

【出典：文系教務課記録】

観点5-2 関係者からの評価

(観点に係る状況)

平成18年度末から19年度初頭にかけて、修了後3年前後の修了生を対象に実施した調査で、「人文学の知の伝統に対する探究心」、「新時代への深い洞察力」、「言語による表現力」という教育目標に対し、100%、43%、86%の修了生が、これらの能力や資質を在学中に身につけたと回答した。また、各項目について、100%、100%、100%の修了生が、こうした学力や資質・能力は、研究科の専門教育課程(とくに演習科目)および研究活動によって養われたと考えている。71%の修了生は、名古屋大学における教育活動が、社会が期待する水準をほぼ満たしていると回答した。【別添資料V-A参照】

さらに、上記修了生の職場の上司をはじめとする上長を対象とした調査で、90%前後の上長が、名古屋大学の教育目的である「機会をつかむ行動」、「困難にいとむ行動」、「自律性と自発性を育む行動」を、修了生が心がけていると回答した。また、80~90%の上長が、文学研究科の教育目標である「人文学の知の伝統に対する探究心」、「新時代への深い洞察力」、「言語による表現力」を、修了生が身につけていると評価した。67%の上長は、名古屋大学における教育活動が、社会が期待する水準をほぼ満たしていると回答した。【別添資料V-B参照】

別添資料V-A 修了生成果調査(平成18-19年度実施)

別添資料V-B 修了生上長成果調査(平成18-19年度実施)

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由) 就職や進学に関する状況から、人材養成目的に合致した人材が養成されていることがわかり、観点5-1は期待される水準にある。また、修了生やその上長を対象とした成果調査から、本研究科の教育が教育目標に照らして高い成果を上げていることがわかり、観点5-2は期待される水準にある。

Ⅲ 質の向上度の判断

① 事例1 「教育研究推進室の設置とファカルティ・ディベロップメントの推進」(分析項目Ⅰ、Ⅳ)

(質の向上があったと判断する取組)

教育研究推進室を設置し、授業評価アンケートの結果の分析や教員へのフィードバックを通して、授業改善に努めている。また、教育研究推進室の主催で、月1回、大学院教育の諸問題について教員や院生が意見交換をするワークショップを開催している。【資料Ⅰ-2-1、別添資料Ⅰ-C参照】

② 事例2 「コースツリーの策定とシラバスの整備」(分析項目Ⅱ、Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組)

大学院教育の高度化と課程博士号取得を促進するため、コースツリーを策定した。また、平成18年度から全ての科目で作成しているシラバスは、電子化されており、授業の内容の他、コースツリー上の位置づけ、目標および目標に対応した評価の方法、自宅学習の指示が明記されている。【資料Ⅱ-1-1、別添資料Ⅲ-A参照】

③ 事例3 「競争的資金獲得によるカリキュラムの充実」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択に伴い、平成18年度から前期課程に人文フィールドワーカー養成プログラムを導入した。また、グローバルCOEプログラムの採択に伴い、後期課程のカリキュラムの充実に取り組んだ。獲得した競争的資金により、学生の研究助成や研究員雇用等を実現した。【資料Ⅱ-1-4、Ⅱ-2-9、別添資料Ⅱ-A、Ⅱ-B参照】